

Title	成人期の1型糖尿病患者の社会化と自己管理支援に関する研究
Author(s)	梅田, 英子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/76474">https://hdl.handle.net/11094/76474</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 ( 梅田 英子 )

論文題名

成人期の1型糖尿病患者の社会化と自己管理支援に関する研究

## 論文内容の要旨

**【目的】** 1型糖尿病は膵臓のβ細胞の破壊によってインスリン分泌不足となり、インスリン補充が必要となる疾患である。発症のピークは幼児期と思春期であり、1型糖尿病は小児の疾患とされることが多かった。しかし、近年成人期以降の発症も注目されており、成人期発症の1型糖尿病患者は糖尿病患者総数の約5%と推定と報告されているが、成人期以降に発症した1型糖尿病についての実態調査は始まったばかりである。成人期における糖尿病患者のほとんどが2型糖尿病であることから、これらが成人期の1型糖尿病患者に関する調査が進まない一因となっている。成人期は就労、結婚、出産、子育てといった成人期特有で多様なライフイベントを経験する時期であり、その生活の中に糖尿病管理を組み込んでいくことには大変な困難が予測される。そこで、本研究ではまず、成人期の1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴を把握し、ライフイベントに関連して経験する日常生活上の困難の内容、および患者の支援ニーズを明らかにすることで、成人期の1型糖尿病患者が社会生活の中で糖尿病の自己管理を促進させるための看護支援を検討することを目的とした。

**【研究1】 クラスタ分析による成人期1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴**

1. 目的：クラスタ分析を用いて成人期の1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴を明らかにすることである。
2. 方法：既存データは、糖尿病認定看護師が勤務している国内の25病院から研究の趣旨を理解し文書により参加の同意が得られた者368名から、外来通院患者のデータを用いた。1型糖尿病患者のデータは、国内の糖尿病専門クリニックに通院している1型糖尿病患者で、研究の趣旨を理解し文書により参加の同意が得られた者で、研究2及び研究3で行ったアンケート調査から、糖尿病セルフケア能力測定ツール（IDSCA）のデータを用いた。調査用紙は907名に配布し、379名から返送があった(回収率41.7%)。それぞれのセルフケアの特徴を、Ward法によるクラスタ分析により検討し、クラスタ間の比較にはKruskal-Wallis testを行った。
3. 結果：1型糖尿病患者のクラスタ分析では、4つのクラスタに分類できた。既存のデータとの分析と比較すると1型糖尿病患者の集団では、モニタリング力、応用調整力などのセルフケア能力が極端に低いクラスタは存在しなかった。クラスタ間ではクラスタ4はセルフケア能力の総合得点が最も低く、HbA1C値の平均は8.1%でも最も高い値を示していた。セルフケア能力の中ではサポート活用力と自分らしく自己管理する能力が低い点も特徴的で、同疾患患者との交流があると回答した割合も4つのクラスタ間で最も低かった。

**【研究2】 成人期の1型糖尿病患者の日常生活の困難とセルフケア能力との関連**

1. 目的：成人期の1型糖尿病が日常生活のライフイベントを通して経験する困難の内容を明らかにし、患者の背景要因と糖尿病のセルフケア能力が日常生活の困難に及ぼす影響を調査することである。
2. 方法：日本国内の糖尿病専門病院の27施設に研究への参加を依頼し、同意が得られた17施設の1型糖尿病患者を対象に自記式質問紙調査を実施し、郵送法により回収を得た。調査用紙は、日常生活における困難を把握するために作成した51項目の調査用紙と、IDSCAを用いた。基本情報、日常生活の困難、IDSCAを調査し、日常生活の困難

への影響要因を検討するために因子分析および重回帰分析を行った。

3. 結果：質問紙の返送が得られた379名（回収率41.7%）から、年齢要件、調査表への完全回答を満たした336名を分析した。成人期の1型糖尿病患者の日常生活で経験する困難で頻度が高いものは、糖尿病治療の経済的負担、生命保険の入りにくさ、2型糖尿病と間違えられることだった。日常生活における困難の構成要素は、因子分析の結果、4因子15項目となり、第1因子は【仕事（家庭）や学校のため糖尿病を日常生活に取り込むことが困難】、第2因子は【疾患開示の困難】、第3因子は【就職や就学上の困難】、第4因子は【糖尿病についての知識不足による困難】であった。PAIDは、日常生活の困難の4因子すべての予測因子であった。また【疾患開示の困難】は男性、既婚者、【仕事（家庭）や学校のため糖尿病を日常生活に取り込むことが困難】は不良なHbA1C、【就職や就学上の困難】はIDSCA、PAID【糖尿病に関する知識不足】は罹病期間と関連していた。

### 【研究3】成人期の1型糖尿病患者の日常生活における支援ニーズと自己管理支援方法の検討

1. 目的：成人期の1型糖尿病患者の日常生活の中で必要としている支援ニーズを明らかにし、患者の背景要因と糖尿病療養による負担感（PAID）が患者の支援ニーズに及ぼす影響を調査することである。

2. 方法：研究の対象、データ収集方法および調査方法は研究2に準じる。調査用紙は、日常生活における支援ニーズを把握するために作成した46項目の調査用紙と、PAIDを用いた。基本情報、支援ニーズ、PAIDを調査し、支援ニーズへの影響要因を検討するために因子分析および重回帰分析を行った。

3. 結果：質問紙の返送があった中から、年齢要件、PAIDに完全回答が得られた327名を分析した。支援ニーズの構成要素は、4因子23項目が抽出された。第1因子は【仕事（家庭）や学校など自分の生活にあった糖尿病管理方法を助言してほしい】、第2因子は【糖尿病以外の病気や合併症について気にかけてほしい】、第3因子は【同疾患患者や家族と一緒に交流・相談できる場が欲しい】、第4因子は【育児や介護の役割や負担を理解してほしい】であった。【糖尿病以外の病気や合併症について気にかけてほしい】は不良なHbA1c、【仕事（家庭）や学校など自分の生活にあった糖尿病管理方法を助言してほしい】は罹病期間の短さと関連していた。PAIDの得点の高さ、および同疾患患者との交流があることは、支援ニーズ4因子すべての予測因子であることがわかり、1型糖尿病患者にとってピアサポート重要性が示唆された。また支援ニーズの充足による糖尿病療養による負担感の軽減への可能性が示唆された。

【総括】本研究では、成人期の1型糖尿病患者に対するサポート活用力に働きかけた早期からの強力なセルフケア支援の重要性が示唆された。また、ピアサポートが受けやすい環境作りへの支援も必要であることがわかった。日常生活の困難は、診断直後から出現する疾患開示の困難や、継続した治療の中でライフイベントに応じて直面することが予測される困難など、成人期からの長い人生で繰り返し直面する可能性があった。1型糖尿病患者が糖尿病の自己管理を継続しながら自分らしく生きていくためには、これらの困難な経験への対処を試行錯誤しながら、自分らしい自己管理方法を見つけていく挑戦を続けていくことであり、長期的な関わりを通して患者の挑戦を支援することが1型糖尿病患者の社会化の促進につながると考える。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 梅 田 英 子 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 清水 安子
	副 査 教授 山崎 あけみ
	副 査 教授 福井 小紀子

## 論文審査の結果の要旨

**【目的】**1型糖尿病はインスリン分泌の絶対的不足により、インスリン補充が必要となる疾患である。発症のピークは幼児期と思春期であり、1型糖尿病は小児の疾患とされることが多かった。しかし、近年成人期以降の発症も注目されており、成人期発症の1型糖尿病患者は糖尿病患者総数の約5%と推定と報告されているが、成人期以降に発症した1型糖尿病についての実態調査は始まったばかりである。成人期における糖尿病患者のほとんどが2型糖尿病であることから、これらが成人期の1型糖尿病患者に関する調査が進まない一因となっている。成人期は就労、結婚、出産、子育てといった成人期特有で多様のライフイベントを経験する時期であり、その生活の中に糖尿病管理を組み込んでいくことには大変な困難が予測される。そこで、本研究ではまず、成人期の1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴を把握し、ライフイベントに関連して経験する日常生活上の困難の内容、および患者の支援ニーズを明らかにすることで、成人期の1型糖尿病患者が社会生活の中で糖尿病の自己管理を促進させるための看護支援を検討することを目的とした。

**【研究1】クラスタ分析による成人期1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴**

1. 目的:クラスタ分析を用いて成人期の1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴を明らかにすることである。
2. 方法:既存データは、糖尿病認定看護師が勤務している国内の25病院から研究の趣旨を理解し文書により参加の同意が得られた者368名から、外来通院患者のデータを用いた。1型糖尿病患者のデータは、国内の糖尿病専門クリニックに通院している1型糖尿病患者で、研究の趣旨を理解し文書により参加の同意が得られた者で、研究2及び研究3で行ったアンケート調査から、糖尿病セルフケア能力測定ツール(IDSCA)のデータを用いた。調査用紙は907名に配布し、379名から返送があった(回収率41.7%)。それぞれのセルフケアの特徴を、Ward法によるクラスタ分析により検討し、クラスタ間の比較にはKruskal-Wallis testを行った。
3. 結果:1型糖尿病患者のクラスタ分析では、4つのクラスタに分類できた。既存のデータとの分析と比較すると1型糖尿病患者の集団では、モニタリング力、応用調整力などのセルフケア能力が極端に低いクラスタは存在しなかった。クラスタ間ではクラスタ4はセルフケア能力の総合得点が最も低く、HbA1C値の平均は8.1%でも最も高い値を示していた。セルフケア能力の中ではサポート活用力と自分らしく自己管理する能力が低い点も特徴的で、同疾患患者との交流があると回答した割合も4つのクラスタ間で最も低かった。

**【研究2】成人期の1型糖尿病患者の日常生活の困難とセルフケア能力との関連**

1. 目的:成人期の1型糖尿病が日常生活のライフイベントを通して経験する困難の内容を明らかにし、患者の背景要因と糖尿病のセルフケア能力が日常生活の困難に及ぼす影響を調査することである。
2. 方法:日本国内の糖尿病専門病院の27施設に研究への参加を依頼し、同意が得られた17施設の1型糖尿病患者を対象に

自記式質問紙調査を実施し、郵送法により回収を得た。調査用紙は、日常生活における困難を把握するために作成した51項目の調査用紙と、IDSCAを用いた。基本情報、日常生活の困難、IDSCAを調査し、日常生活の困難への影響要因を検討するために因子分析および重回帰分析を行った。

3. 結果:質問紙の返送が得られた379名(回収率41.7%)から、年齢要件、調査表への完全回答を満たした336名を分析した。成人期の1型糖尿病患者の日常生活で経験する困難で頻度が高いものは、糖尿病治療の経済的負担、生命保険の入りにくさ、2型糖尿病と間違えられることだった。日常生活における困難の構成要素は、因子分析の結果、4因子15項目となり、第1因子は【仕事(家庭)や学校のため糖尿病を日常生活に取り込むことが困難】、第2因子は【疾患開示の困難】、第3因子は【就職や就学上の困難】、第4因子は【糖尿病についての知識不足による困難】であった。PAIDは、日常生活の困難の4因子すべての予測因子であった。また【疾患開示の困難】は男性、既婚者、【仕事(家庭)や学校のため糖尿病を日常生活に取り込むことが困難】は不良なHbA1C、【就職や就学上の困難】はIDSCA、PAID【糖尿病に関する知識不足】は罹病期間と関連していた。

### 【研究3】成人期の1型糖尿病患者の日常生活における支援ニーズと自己管理支援方法の検討

1. 目的:成人期の1型糖尿病患者の日常生活の中で必要としている支援ニーズを明らかにし、患者の背景要因と糖尿病療養による負担感(PAID)が患者の支援ニーズに及ぼす影響を調査することである。

2. 方法:研究の対象、データ収集方法および調査方法は研究2に準じる。調査用紙は、日常生活における支援ニーズを把握するために作成した46項目の調査用紙と、PAIDを用いた。基本情報、支援ニーズ、PAIDを調査し、支援ニーズへの影響要因を検討するために因子分析および重回帰分析を行った。

3. 結果:質問紙の返送があった中から、年齢要件、PAIDに完全回答が得られた327名を分析した。支援ニーズの構成要素は、4因子23項目が抽出された。第1因子は【仕事(家庭)や学校など自分の生活にあった糖尿病管理方法を助言してほしい】、第2因子は【糖尿病以外の病気や合併症について気にかけてほしい】、第3因子は【同疾患患者や家族と一緒に交流・相談できる場が欲しい】、第4因子は【育児や介護の役割や負担を理解してほしい】であった。【糖尿病以外の病気や合併症について気にかけてほしい】は不良なHbA1c、【仕事(家庭)や学校など自分の生活にあった糖尿病管理方法を助言してほしい】は罹病期間の短さと関連していた。PAIDの得点の高さ、および同疾患患者との交流があることは、支援ニーズ4因子すべての予測因子であることがわかり、1型糖尿病患者にとってピアサポート重要性が示唆された。また支援ニーズの充足による糖尿病療養による負担感の軽減への可能性が示唆された。

【総括】本研究では、成人期の1型糖尿病患者に対するサポート活用力に働きかけた早期からのセルフケア支援の重要性が示唆された。また、【疾患開示の困難】を抱え、【1型糖尿病患者の交流の場を求めるニーズ】が明らかになったことから、小児期だけでなく、成人期においてもピアサポートが受けやすい環境作りへの支援が求められていると言える。さらに【糖尿病を日常生活に適応させることの困難】【糖尿病に関する知識不足】といった困難を抱え、【合併症などの身体的ケアのニーズ】【仕事や学校生活に合わせた自己管理支援のニーズ】【仕事や学校生活に合わせた自己管理支援のニーズ】といった支援ニーズが明らかになったことからライフイベントに応じて直面することが予測される困難を踏まえ、生活状況に合わせた血糖コントロールが可能となるようインスリン調整の方法を現在開発が進んでいるCGMやインスリンポンプを活用しながら、成人期の1型糖尿病に特化した支援システムの構築が求められていると考えられた。

日本全国の300名を超える成人期1型糖尿病患者を対象に日常生活の困難や支援ニーズを調査する研究はこれまで行われていない。そして、それらのデータをもとに1型糖尿病患者のセルフケア能力の特徴、日常生活の困難や支援ニーズ、影響要因を明らかにすることで、成人期の1型糖尿病患者への支援の方向性を示すことが出来た点も新規性が高く、今後の看護実践に貢献できる結果であり、博士(看護学)の学位に値すると評価した。